



永井総長・学長の説明を聞く報道関係者

この日は招待状を送付した報道関係各社のなかから約60人が出席。大学側からは、久野修慈理事長、永井和之総長・学長はじめ常任理事、副学長、各学部長ら約20人が出席し、懇談会と交流会の二部構成で行われた。

「第一部の懇談会では、久野理事長が挨拶に立ち、日本が抱える食糧問題や資源問題に触れたうえで、新たな時代を乗り切るためにも、日本の未来を背負う若者を育てることが大学の使命である」と強調、その使命達成のために「大学の舵取りを行ってきたい」と抱負を語った。

続いて永井総長・学長が「中央大学のビジョン」について、スクリーンを使ってパワーポイントやビデオで説明。まず、「大学は一人の人間に基礎を教える最後の場です」と大学教育の重要性を指摘し、「大学で伸びる人は自分の将来の『生きざま』を考える人。企業で伸びる人は人間力、コミュニケーション力、語学力など基礎的な力を持っている人」と述べ、「全学的基礎教育の向上」と「国際化の推進」で中大ブランド力の向上を図っていく考えを示した。



乾杯し、和やかな歓談へ

中大の取組み・将来ビジョンを説明 報道関係者を招き、懇談会開く

中央大学の近況、取組み・将来ビジョンについて報道関係者に広報するとともに、広く情報交換し、親睦を深

めようとして、「2009年度報道関係者との懇談会」（広報室主催）が6月25日、中央大学駿河台記念館で開催された。

「大学の舵取りを行って

きたい」と抱負を語った。

続いて永井総長・学長が

「中央大学のビジョン」に

ついて、スクリーンを使っ

てパワーポイントやビデオ

で説明。まず、「大学は一人

の人間に基礎を教える最後

の場です」と大学教育の

重要性を指摘し、「大学で

伸びる人は自分の将来の『

生きざま』を考える人。

企業で伸びる人は人間力、

コミュニケーション力、語

学力など基礎的な力を持っ

ている人」と述べ、「全学

的基礎教育の向上」と「国

際化の推進」で中大ブラン

ド力の向上を図っていく考えを示した。

具体的には「全学共通基

礎科目」や「全学融合教育

の拡充」について触れ、「高

校生のときに選択した学部

や学科が本当に合っている

のかどうかを、学生に考え

させる」として学部を超え

た教育の場であるFLPに

ついて説明。また、社会で

学ぶ機会となる

インターン

シップ制度な

どで充実した

「実学」教育

に取り組んで

いることを紹

介した。

また永井総

長・学長は、

中央大学の建

学の精神であ

る『実地応用

の素を養うこ

と』に触れて、

資格取得だけ

ではなく、問

題処理のための考え方やなどを身につけさせることを強調した。

「国際化の推進」につい

ては、「地球規模の問題に

こたえられるような人材を

輩出していく」と述べて、

「既存の学部・大学院の国

際化」と「新しい教育組織

の国際化」の2つのビジョ

ンを挙げた。

そのうえで海外の大学との相互交換授業や、英語、ITによる授業など教育方法の国際化などについて説明。新しい教育組織としては、「既存学部を刺激を与えるようなモデル的な学部」の新設や、国際化を担う学生を育てる附属中高一貫校の新設、「中大精神」を教育するための新しい施設の建設なども紹介された。

永井総長・学長は、最後に「建学の精神を再構築し、世界的規模のネットワークをつくって世界に人材を派遣する大学にしていきたい」と述べ、説明を締めくくった。

また、中大卒の報道関係者からは、「外から見て中大は地味だと思う。何でもいだから一番を取るなど魅力ある大学にしないと、いい人材が集まってくれない」という厳しい意見もあつた。これに対し、永井総長・学長は「何かで一番を取ることは考えている。中大の魅力をアピールできるように努力したい」と語った。

また、中大卒の報道関係者からは、「外から見て中大は地味だと思う。何でもいだから一番を取るなど魅力ある大学にしないと、いい人材は集まってくれない」という厳しい意見もあつた。これに対し、永井総長・学長は「何かで一番を取ることは考えている。中大の魅力をアピールできるように努力したい」と語った。

第一部終了後は、会場を移して第二部の交流会が行われ、和やかな雰囲気の中で、報道関係者と大学関係者が歓談、親睦を深めた。最後に中川洋一郎副学長が挨拶し、交流会を締めくくった。

（学生記者 新部真子Ⅱ文学部4年／廣瀬功一Ⅱ文学部2年／野崎みゆきⅡ法学部2年）

多摩市長らが「21世紀の公務員像」を語る 理工学部で第1回都市環境フォーラム開く

理工学部の新しい「協働（コラボレーション）」づくりを目指す第1回都市環

境フォーラムが7月4日、「21世紀の公務員像」中央

待」と題して、後楽園キャンパスで開かれた。都市環境フォーラムは、

09年4月、土木工学科の名称が都市環境学科に改称されたのを機に、学生と卒業生とのネットワーク強化を図ろうと創設されたもので、この日は多摩市の渡辺幸子市長（1972年法学部卒）の基調講演と、公務員として第一線で活躍している卒業生らによるパネルディスカッションが行われ、公務員を志す学生ら約40人が熱心に聞き入った。

トに、希望していた福祉では障害者や保育園、ボランティア業務に関わり、さらに文化活動に携わってきたことなどを振り返りながら、「市民と共に歩んだ職員時代だった」と述べ、体験を踏まえて「市民目線での政策形成が必要」と強調した。また、渡辺市長は会場からの質問に答え、「市民パワーをいかに生かすかで自治体の将来が決まってくる

渡辺市長は基調講演で、はじめに公務員になった理由について①男女平等であること②福祉の仕事がしたかったこと③を挙げ、急速に発展する多摩市をとくに選んだと説明。市民課をスター



第1回都市環境フォーラム

と思う」などと述べた。

このあと休憩をはさんで、渡辺市長と加藤和博氏（1973年卒）、小山豊氏（1977年卒）、磯田博和氏（1986年卒）、前川亮太氏（1998年卒）が出席して、パネルディスカッションが行われた。

このなかで、加藤氏（千葉県庁勤務）は、公務員のやりがいについて「仕事の中に市民の方から労りの声をかけてもらえること」と、県民との触れ合いを挙げた。小山氏（相模原市役所勤務）は、「広い視野をもって環境の変化に対応できることが求められる」と指摘。

磯田氏（川崎市役所勤務）は、公務員像について「我慢

不満をもつ人をいかに少なくするかだ」との考えを披瀝。また前川氏は（国土交通省勤務）は、「自分が計画立案したプロジェクトが結果として町や道路になっていく」と公務員の仕事の魅力を語った。

最後に公務員を目指す学生への応援メッセージとして、前川氏は「積極的に人の輪の中に入っていくことが大事」、磯田氏は「現場を大事に」とそれぞれ指摘。小山氏は「心の根底に『土木』を留めていて欲しい」と学科の名称が変わっても

『土木』への愛惜を強調。

また加藤氏は「百聞は一見にしかず。コンサルト会社などでアルバイトしたらよい」と提案。渡辺市長は「（仕事に）誇りを持って欲しい」とメッセージを送った。

都市環境学科は、安全・利便・快適そして品格のある都市の生活環境を市民とともに創造し、豊かな環境・文化を次世代につないでいく責任を果たせる技術者を育成することを目標としている。

（学生記者 池谷祐宜 Ⅱ 学部3年）

望月理香さん（理工院修了）が文部科学大臣賞受賞 第23回先端技術大賞「色弱補正法の研究」で

中央大学大学院理工学研究科博士前期課程情報工学専攻2008年度修了生の

望月理香さんが、先端技術分野の優れた研究成果をあげた理工系学生と企業の若

手研究者を表彰する「第23回独創性を拓く 先端技術大賞」（主催・フジサンケ

イビジネスア

イ、後援・産経新聞社など）の文部科学大臣賞を受賞した。授賞式は7月23日、高円宮妃殿下

ご臨席の下、東京・元赤坂の明治記念館で行われ、望月さんに浮島とも子・文部科学大臣政務官（当時）から賞状が贈られた。

先端技術大賞は、若手研究者の独創性を育み、科学技術創造立国の実現の一助となることを目的に1987年に創設された。今回は学生部門に32件、企業部門に36件の応募があり、その中から審査（委員長・阿部博之・東北大学名誉教授）の結果、望月さんが応募した色弱補正技術を活用し、個々の式弱者に対応できる「色弱補正法の研究」が学生部門の最優秀賞である文部科学大臣賞に輝いた。



望月理香さん

◆ ◆ 私たちが普段何気なく見ている視界の中の色は、よく考えてみると、他人がその色をどのような色として見ているかは、誰も確かめることができない。ましてや色弱者になると、どの色がどのように見えていて、健常者とのように違うのか、ということが具体的にわからない。

望月さんは、この点に着目し、色の感じ方を定量化し、色弱者と健常者の色の見え方の違いを具体的に表し、そこから補正を行うことで、色弱者がより健常者の見ている色と同じ色を感じることができるようになる



高円宮妃殿下ご臨席のもとで、文部科学大臣賞を受賞する望月理香さん（産経新聞社提供）

る新しい方法を開発した。色の識別という芸術的観点と、色弱者に対する新しい治療（補正）法という医療的観点、そしてリーマン幾何学を用いて人の感覚を具現化するという数学的観点の3つのまったく異なった分野を融合させて見出し

た研究は、「斬新的な発想に基づく挑戦的な研究」という評価を受けた。

望月さんが、受賞の知らせを聞いたのは、母親からの携帯メールだった。「卒業記念の感で応募したので、受賞を聞いた時は本当

に驚きました。ただ、私はもう働いていたので受賞を聞いた次の日も仕事に行き、あまり実感が湧きませんでした」。受賞した研究論文は、修士2年を卒業するときに書いたもので、望月さんは今春から企業の研究所に勤務している。

「もともと数学が好きで、絵画などの芸術・美術も好きだった」という望月さん。全く異なる2つのことを合わせて何かできないか、と考え、指導教官の趙晋輝教授と話し合っているときに研究内容がまとまった。

「趙先生は、物事を楽しく考える方で、自分が研究に行き詰っている時に相談に行くと、とても楽しい方向で考えてくださる方です。研究に関するディスカッションもかなりやりました」

望月さんは、研究で大変だったのは「ひとつの実験にとっても時間がかかったこ

とです」という。「1人の人間に対してひとつの色を実験するのに2時間くらいかかります。休憩をはさんだり、被験者が実験に慣れるまでのデータは使わないので、実質4時間以上かかってしまうんです」。

趙教授は「望月さんは非常に根気よく実験を続けてくれた」と称賛。望月さん自身は、「とてもめりこむタイプです。ひとつのことを考え続けることが好きですし、得意なことでもあります」と自己分析した。

授賞式後のレセプション会場では、受賞者のパネルが展示され、研究内容について受賞者と自由に質疑応答ができるようになっていて、望月さんのパネルの前には常に人だかりができていた。

「質問の中で一番多かったのは、『色弱者』というのは実際にどの色がわかりにくいのか、というもので

した。その他にも、実用化できるのか、という質問や、人が見ている色がわかる、ということに興味を持ってくださる方もいらっしゃいました」

望月さんは、今後について「今まで色彩について研究してきましたが、この研究を続けるにしても、色彩についていろんな角度から学んで専門家になりたい。何かひとつ秀でた人になりたい、と思っています」と将来を見据えている。

望月さんは勤務のかたわら9月から社会人ドクターとして中央大学に再び通う。「大学での研究は、土曜日などに時間を見つけて続けていくつもりです」という。「まだまだやり残したことがたくさんある」と今後の研究活動に意欲を見せていた。

（学生記者 橋本奈緒美 11年）
大学院理工学研究科博士2年



栄養レンジャー

第6回体験型環境教育プロジェクト開く 「食育と地産地消」テーマに16大学参加

多摩地域の小学生に多摩の良さを学んでもらいたい
 —と8月6、7の両日、第6回体験型環境教育プロジェクト（主催：社団法人

ネットワーク多摩）が開かれた。

このプロジェクトには、ネットワーク多摩に加盟する中央大学はじめ実践女子

梓さんは、「楽しみながら、小学生にきちんと栄養を理解してもらえたので、とても嬉しく感じた」と感想を話してくれた。

また、小学生に農業の大切さを知ってもらうために、乳しぼりのプログラムを考えたのは、日本獣医生命科学大学の学生だ。実地研修や机上で学んだ知識を小学生に伝えた。

このように栄養の知識だけでなく農業や多摩地域についてなど、このプロジェクトは参加する子供にとって総合的な学習の場となっている。その総合的な学びの場を実現するために中心となって活動したのが、中央大学総合政策学部の細野助博ゼミの学生だ。

小学生に栄養の大切さを伝えるプログラムでは、実践女子短大で食育を教える白尾教授のアドバイスで、五大栄養素に扮した大学生の栄養レンジャーがそれぞれの栄養の効果を寸劇を交えて伝えた。

実践女子短大1年の新海

可能性を感じた。この経験や喜びを多くの学生に知ってもらいたい」と、さらに多くの学生の参加を呼びかけている。

今回の第1部に続き、第2部は11月7日に高尾のわくわくビレッジで開かれる。（学生記者 山岸怜奈 11総合政策学部3年）

